

過激な冗談の親和的意図が伝わるという期待の形成プロセスの検討

葉 山 大 地* 櫻 井 茂 男**

本研究は、冗談に対して親和的意図を知覚せずに、聞き手に怒りを感じさせる冗談を過激な冗談として取り上げ、こうした過激な冗談の話し手が、親和的意図が聞き手に伝わるという期待を形成する過程を関係スキーマの観点から検討した。大学生 159 名を対象とした予備調査から、過激な冗談として、“倫理的・性的タブーに関する冗談”、“聞き手の悩みに関する冗談”、“聞き手の外見や行動に関する冗談”、“聞き手の好きな人や物に関する冗談”が同定された。次に大学生 251 名を対象とした本調査を行い、これらの過激な冗談の親和的な意図が聞き手に伝わるという期待は、冗談関係の認知(“冗談に対する肯定的反応に基づく他者理解感”と“冗談に対する被受容感”)に基づいていることが明らかとなった。特に、“冗談に対する被受容感”は全ての冗談において親和的意図が伝わるという期待に正のパスが見られた。“冗談に対する肯定的反応に基づく他者理解感”は性的タブーに関する冗談と聞き手の友人や恋人に関する冗談にのみ正のパスが見られた。また、本研究から、冗談関係の認知は、冗談行動に相手が笑った頻度を背景として形成されることが示唆された。

キーワード：冗談、からかい、親和的意図が伝わる期待、冗談関係の認知、冗談行動

問題と目的

友人との間で日常的に行うコミュニケーションとして、冗談が挙げられる。冗談とは、“ある個人が、他者におかしさを感じさせることを意図して表出する言葉”と定義される(葉山・櫻井, 2008)。冗談を言い合うことは、楽しい雰囲気を作り出したり、親密さを相手に伝えたりするため、対人関係において有効なコミュニケーションの一つである(Martin, 2007)。例えば, Fraley & Aron (2004) は、笑いの共有が相手への親密感を高めることを実験により実証している。

その一方で、冗談やからかい(teasing)¹によって相手を怒らせたり、冗談を侮辱であると知覚されたりする危険性があることが指摘されている(Lampert & Ervin-Tripp, 2006)。例えば, Keltner, Young, Heerey, Oemig, & Monarch (1998) や Kowalski (2000) は、からかいの対象者(target)は怒りなどの不快感情を持っていることを示している。また、からかいが有害な効果を有することがいじめ研究において論じられる場合がある(Roberts & Coursol, 1996)。日常生活においても、友人間の冗談が行き過ぎていじめへと発展したり、からか

いへの報復としての傷害事件が起こるなどしており、冗談やからかいに対する関心が高まっている。近年、我が国でもからかいに関する研究(遠藤, 2007; Endo, 2007)が増えつつあるが、これまでほとんど心理学の研究対象としては着目されてこなかった。他者を楽しませるための向社会的からかい(脚注1参照)であっても、相手を怒らせてしまう可能性があるという点を考えると、こうした現象の背景となる要因やその過程を検討していく必要があるのではないかと考えられる。

¹ からかいはいくつかの下位分類が存在する。例えば Kowalski, Howerton, & McKenzie (2001) は「ユーモアの程度」「曖昧さ」「アイデンティティへの直面」という3つの観点から、からかいを「向社会的からかい(prosocial teasing)」「残酷なからかい(cruel teasing)」に区別し、冗談やいじめといった関連概念との弁別を試みている。Kowalski et al. (2001) によると、「冗談」はユーモアの程度が高く、曖昧さが低く、アイデンティティへの直面が低いという特徴を有する。冗談ともっとも近いからかいは「向社会的からかい」であり、ユーモアの程度が高く、曖昧さが低く、アイデンティティへの直面が中程度であるという特徴を有す。こうした概念的な類似を考慮し、本研究においては、からかいの中で冗談に近いからかいは特に「向社会的からかい」と表記することとする。また、後述する「過激な冗談」は Kowalski et al., (2001) の分類においては、「残酷なからかい」と類似しているといえる。残酷なからかいはユーモアの程度と曖昧さが中程度であり、アイデンティティへの直面が大きい特徴を有する。なお先行研究の紹介等で「からかい」と総称せざるを得ない場合があるが、その際は向社会的からかいと残酷なからかいを共に包括するものとして扱っている。

* 筑波大学大学院人間総合科学研究科
〒300-1221 茨城県つくば市天王台 1-1-1
dhayama@human.tsukuba.ac.jp

** 筑波大学大学院人間総合科学研究科・心理学系
ssakurai@human.tsukuba.ac.jp

なぜ、人々は他者を怒らせる可能性がある冗談を言うのであろうか？他者に対してからかいを行うことは、しばしば敵意や攻撃性といったパーソナリティの観点から論じられるが (Martin, Puhlik-Doris, Larsen, Gray, & Weir, 2003), こうした観点だけから、からかいを捉えるのは十分ではない。なぜならば、向社会的からかい等のからかいは、表面上は侮辱や攻撃の形態を取るが、その背後には愛情や友情を間接的に伝えるという側面があると論じられているからである (Norrick, 1994 ; Oring, 1994)。すなわち、話し手は、相手を楽しませようとして冗談のつもりで言っているという自分の親和的意図 (benign intentions) を相手が理解してくれるという期待に基づいて冗談を言っている可能性がある。例えば、Lampert & Ervin-Tripp (2006) は、話し手は相手が冗談だと理解してくれるという期待に基づいて、冗談の内容を変化させていると論じている。

ただし、こういった話し手の期待に対して、Shapiro, Baumeister, & Kessler (1991) や Kruger, Gordon, & Kuban (2006) は、親和的意図の知覚はからかい手とからかいの対象者の間でズレが生じており、聞き手は話し手の意図をよりネガティブに捉えていることを明らかにしている。また、我が国においても、Endo (2007) は、からかいの対象者のほうがからかい手よりも、ユーモラスな意図を知覚していないことを示している。

これらの先行研究の知見を踏まえると、冗談の話し手は親和的意図が相手に伝わると期待するが、それが常に満たされる訳ではないという可能性が唆される。こうした可能性を考慮することは、冗談によって聞き手が怒ったり、傷ついたりするという現象の原因を、攻撃性 (パーソナリティ要因) などの話し手の個人内要因に起因する問題として扱うのではなく、両者のコミュニケーションという個人間要因に起因する問題として捉えられるという点で意義があるといえる。こうした点は教育場面にも適用可能であろう。例えば、いじめの発生を加害者の児童の攻撃性や敵意から捉えるだけでなく、最初は話し手の児童も聞き手の児童も共に楽しみうる冗談であったのが、徐々に過激さを増し、その結果、ある時点で聞き手の児童が親和的意図を知覚できずにいじめと解釈してしまうというプロセスから捉えることができる。このような新たな視点は、問題への介入や児童への指導などをより柔軟に行うことが可能にすることが期待される。

これまでの研究において、二者間で冗談が伝わらないという現象を引き起こす要因がいくつか指摘されている。例えば、(1)話し手の能力や伝達手法の不備とい

う“話し手の要因” (Lampert & Ervin-Tripp, 2006 ; Miller, 1986) や、(2)社会的スキルといった聞き手の要因 (Endo, 2007), (3)話題の不適切さという“話題の要因” (Kowalski, 2000 ; Kruger et al., 2006), (4)状況の不適切さ (Norrick, 1994) という“状況の要因”が論じられている。心理学の実証的研究においては特に話題の要因が取り上げられる傾向にある。例えば、Kruger et al. (2006) は、からかいの内容を“身体的特徴 (physical appearance)”, “関係性/セックス (relationship/sex)”, “行動”, “その他”の4つに分類し、“身体的特徴”と“関係性/セックス”に関するからかいは特に両者間で親和的意図の知覚に大きなズレが生じることを示した。

先行研究に残された問題として、以下の2点が挙げられる。1点目は、先行研究 (Endo, 2007 ; Kruger et al. 2006) で扱われている現象は、一般的なからかいにおける意図の知覚のズレであり、両者が楽しさを感じる向社会的からかい (Kowalski, Howerton, & McKenzie., 2001) に重点が置かれている点である。例えば、Kruger et al. (2006) の行った研究においては、友人や家族間のからかいの対象者は、親和的意図を知覚した程度を11段階評定で平均7.35点を示している。これは理論的中間点 (6点) よりも高い値である。話題別に見ても、身体的特徴以外の話題において、理論的中間点以上の値を示している。つまり、先行研究で扱われているからかいは、対象者が親和的意図を知覚できずに怒りを感じるという状態に限定されたものではないといえる。したがって、話し手の冗談に聞き手が親和的意図を知覚できずに怒りを感じる現象に焦点を当て、こうした現象を引き起こすと考えられる過激な冗談にはどんな内容があるかをより詳細に同定する必要がある²。また、その際、他の要因と比較して、話題の要因が特に取り上げるべき重要な要因であるかを併せて検証することも必要だろう。

2点目は、前述のような過激な冗談を友人に表出するきっかけとなる、親和的意図が相手に伝わるという話し手の期待がどのように形成されるのかが十分に明らかとなっていない点である。話し手がどのような要因を背景として、親和的意図が聞き手に伝わるという期待を作り出しているかを明らかにする必要がある。

親和的意図が聞き手に伝わるという話し手の期待を形成する要因として、交友期間の長さや、相手に対して知覚している親密さなどが考えられるが、こうした

² 本研究においては、聞き手が親和的意図を知覚できずに怒りを感じる可能性が高い冗談を“過激な冗談”と呼ぶこととする。

変数のみでは捉えきれない可能性がある。例えば、交友期間の長さに関して、遠矢 (1996) は交友期間が長くとも、関係が膠着化したり、マンネリ化している友人関係があることを指摘している。こうした点を考慮すると、交友期間の長さという変数は相互作用の内容を反映するものではなく、相手に対する期待という心理的変数との関連が低いと考えられる。また、親密度は関係性の質を測定する包括的な変数のひとつであり、相手への期待との関連があると考えられるが、その関連は強いものではないと予想される。なぜならば、親密度は、様々な要素を含む包括的な変数であるため、冗談の意図が伝わる期待という特定の相互作用に特定された変数を捉えきれないと考えられるからである。例えば、従来の心理学においては自己開示を通して親密度の高い友人関係へと発展していくことが指摘されている (Chelune, Robison, & Kommer, 1984; 榎本, 1997)。こうした関係の場合、お互いに対する親密度は高い値を示す一方で、日常において冗談を言い合うという相互作用が無い場合、過激な冗談の親和的意図が伝わるという期待の程度は低いだろうと予想される。

そこで、これらの変数に加えて、本研究では、関係スキーマ (relational schema) の観点から検討を行うこととする。なぜならば、対人的な期待を形成するものとして、お互いの関係の認知が指摘されているからである (Baldwin, 1992; Planalp, 1987)。特に、冗談やからかいは相手との関係性に基づくものであるため (Brown & Levinson, 1987; Keltner et al., 1998)、話し手がお互いの関係をどのように認識しているかが重要であると考えられる。

関係スキーマとは、相手との過去の相互作用を通して形成されたお互いの関係についての知識の枠組みであり、自己スキーマ、他者スキーマ、対人的スクリプトという3つの要素から構成される (Baldwin, 1992)。葉山・櫻井 (2008) は、冗談行動に関連する関係スキーマとして冗談関係の認知を取り上げた。冗談関係の認知とは、お互いの関係を“真面目なコミュニケーションだけでなく、お互いに冗談を言い合える関係”と認知することを指し、この認知は“冗談に対する肯定的反応に基づく他者理解感”と“冗談に対する被受容感”から構成されていることを明らかにしている。親和的意図が相手に伝わるという話し手の期待は、こうした冗談関係の認知に基づいて形成されると考えられる。

さらに、本研究では、冗談関係の認知を形成する要因として、日常生活において過去の冗談行動に相手が笑った頻度を取り上げる。その理由として、関係スキ-

ーマは過去に行った相互作用に基づいて形成されるという性質を持つと論じられているためである (Baldwin, 1992; Planalp, 1987)。例えば、友人との相互作用において、冗談に対して相手が笑わなかった場合、相手への冗談関係の認知は弱められるが、相手が笑った場合、冗談関係の認知は強められるだろう。こうした日常生活における相互作用を繰り返すことにより、冗談関係の認知が強化され、過激な冗談を言っても他者は自分の親和的意図を理解してくれるという期待が形成されるプロセスがあるのではないかと考えられる。

以上より、本研究の目的は以下の3点とする。1点目は、大学生を対象とした予備調査を行い、友人の言った冗談に対して親和的意図を知覚できなかった経験を聞き手の立場から尋ねることを通して、この現象の背景となる要因を探索的に収集し、話題の要因が特に取り上げるべき要因であるかを検討することである。2点目は、過激な冗談の親和的意図が聞き手に伝わるという話し手の期待との関連が予想される変数として交友期間、親密度、冗談関係の認知をそれぞれ取り上げ、各変数との関連を検討し、交友期間や親密度といった変数ではなく、関係スキーマの観点による検討の有効性を検証することである。最後に、3点目は、過激な冗談の親和的意図が聞き手に伝わるという話し手の期待が形成されるプロセスを検討することである。

予 備 調 査

目的

大学生を対象とした自由記述調査の回答を通して、親和的意図を知覚できずに、怒りを感じたという具体的な現象に焦点を当て、その背景となる要因を明らかにする。

方法

対象者 大学生 159 名 (男子 87 名、女子 72 名 平均年齢 19.53 ($SD=1.49$)) であった。

調査内容 回答者に対して、“ここ半年以内で、あなたが同性の友人から冗談を言われたが、その冗談におかしさを感じられなかったり、不快さや怒りを感じたりした経験について質問をします”と教示し、以下の質問に回答を求めた³。

(1) 冗談におかしさを感じられなかった理由および冗

³ 同性の友人に限定した理由としては、Lampert & Ervin-Tripp (2006) が、男性は女性をからかうのを好まないという可能性を指摘している点や、Endo (2007) の研究で扱われたからかいの約 70 個が同性間のものであったという結果を考慮したためである。

談の内容 自由記述法により、回答を求めた。なお、冗談の具体的な内容に関しては、書ける範囲でかまわないことを教示し、倫理的な配慮をした。

(2) **親和的意図の知覚** Kruger et al. (2006) の項目を参考にして、独自に3項目を作成した。項目はそれぞれ“自分を笑わせようという相手の意図を感じ取った”、“相手の発言が冗談であり、ふざけているだけであると感じた”、“相手の発言が、冗談か本気かわからなかった(逆転項目)”であった。回答ラベルは、“全く当てはまらない(1)”、“あまり当てはまらない(2)”、“どちらともいえない(3)”、“やや当てはまる(4)”、“とても当てはまる(5)”の5件法であった。

(3) 経験中に生じた怒り感情を問う項目

経験中に感じた怒り感情に関して、寺崎・岸本・古賀(1992)を参考に、“怒った”、“憎らしい”、“かっとした”、“敵意のある”、“挑戦的な”といった形容詞項目に回答を求めた。回答ラベルは、“全く感じなかった(1)”、“あまり感じなかった(2)”、“少し感じていた(3)”、“はっきり感じていた(4)”の4件法であった。

結果

親和的意図の知覚と怒り感情の記述統計量 親和的意図の知覚を尋ねる3項目の一次元性を確認するため、主成分分析を行った結果、全項目が第1成分に.65以上の負荷を示し、累積寄与率が51.94%となった。以上の結果から、一次元性が確認されたと考えられるが、 α 係数は.53と比較的低い値となった。この点については、項目ごとにI-T相関を求めた結果、それぞれ.30～.39の値を示し、各項目と怒り感情得点との相関においても、値は異なるもののほぼ同様の相関(-.25～-.43)が見られたため、3項目を用いて項目得点を算出した。次に、怒り感情得点においても同様に主成分分析を行った結果、全項目が第1成分に.60以上の負荷を示し、累積寄与率が62.94%となったため、一次元性が確認されたものとする。 α 係数は.81であった。

なお、両変数の項目得点は、各項目の得点を合算し、項目数で除した得点である。

親和的意図の知覚と怒り感情の関連 親和的意図の知覚をした程度に基づき、高群($n=79$)と低群($n=79$)に分け、両群の平均値を求めた結果、高群は3.86点($SD=0.42$)、低群は2.52点($SD=0.54$)となり有意に低群が低かった($t=17.49, p<.01$)。次に、怒り感情得点を算出した結果、高群の怒り感情得点($M=2.10, SD=0.74$)よりも低群の怒り感情得点($M=2.61, SD=0.78$)の方が有意に高かった($t=4.20, p<.01$)。なお、効果量は0.68であった。

背景となる要因の分類 聞き手の立場での回答において、相手の冗談におかしさが感じられなかった理由について104個の記述が得られた。これらの記述を、具体的な冗談の内容を参考として、心理学を専攻する大学院生3名によってKJ法による分類を行った⁴。その結果、回答は12カテゴリーに分類され(Table 1)、さらにこれらのカテゴリーは、状況に関する要因(“冗談を言うべきではない状況”等)、話し手に関する要因(能力に関する要因と伝達手法に関する要因)⁵、話題に関する要因(“聞き手の悩みに関する冗談”、“聞き手の好きな人や物に関する冗談”等)という3つに大別された。これらの要因について、親和的意図の知覚の高群と低群に分け、それぞれの記述数を集計した(Table 1)。その結果、高低群どちらにおいても、話題に関する要因がもっとも多く、約60%を占めていた。特に、低群において、“倫理的・性的タブーに関する冗談”、“聞き手の悩みに関する冗談”、“聞き手の外見や行動に関する冗談”、“聞き手の好きな人や物に関する冗談”という回答が多かった。外見や性的タブーに関する冗談が多かったという本研究の結果は、Kruger et al. (2006) の研究の知見と一致するものである一方、“聞き手の好きな人や物に関する冗談”といった先行研究でみられなかった内容の冗談も見られた。

本 調 査

目的

過激な冗談の親和的意図が聞き手に伝わるという話し手の期待が形成されるプロセスを検討する。

方法

対象者 大学生251名(男性106名、女性145名、平均20.14歳($SD=1.02$))であった。

調査内容 大学に入学してから出会った同性の友人を具体的に一人想起することを求め、以下の質問に回答するよう求めた。

⁴ なお、「電車の中での性的内容であったため」という、複数のカテゴリー(この回答では状況の要因と話題の要因)に分類可能な回答が1つだけ存在したが、この回答は両カテゴリーにそれぞれカウントするという処理を行った。

⁵ Lampert & Ervin-Tripp (2006) は、からかいを成功させる遊戯的な目印(playful marker)として、音韻的な手がかり(母音を伸ばす、口調を早くする)の他に、言語的な工夫(誇張や繰り返し)や、非言語的表出(顔をゆがめる)を挙げている。本研究においては、これらに該当する回答は伝達手法に関する要因として分類することとした。また、伝達手法に関する回答ではないが、「すごく寒かったから」「面白いと思える要素が全く無かった」等の冗談としての稚拙さに関する回答は「スキル不足」と命名し、話し手の要因に含めた。

Table 1 冗談の親和的意図が伝わらないという現象の要因の分類

カテゴリー名	親和的意図の知覚の程度			
	低群		高群	
	数	(%)	数	(%)
話題に関する要因				
わからないことを話題にした冗談	2	4.1	9	16.4
倫理的・性的タブーに関する冗談	6	12.2	6	10.9
聞き手の悩みに関する冗談	7	14.3	9	16.4
聞き手の外見や行動に関する冗談	8	16.3	5	9.1
聞き手の好きな人や物に関する冗談	10	20.4	4	7.3
状況に関する要因				
聞き手が冗談を楽しめない気分	2	4.1	0	0
冗談を言うべきではない状況	2	4.1	3	5.5
相手との関係性の不十分さ	2	4.1	1	1.8
話し手に関する要因				
①話し手の能力に関する要因				
話し手のスキル不足	1	2.0	8	14.5
②伝達手法に関する要因				
冗談であることを伝える表情の失敗	4	8.2	0	0
行き過ぎた言い方	2	4.1	2	3.6
冗談の執拗な繰り返し	1	2.0	2	3.6
その他				
	2	4.1	6	10.9
計	49	100	55	100

(1) その友人との関係についての質問 その友人と出会ってから現在の交友期間を尋ねた。また、その友人に感じる親密度を回答するよう求めた。親密度の回答ラベルは、“全く親しくない(1)”, “あまり親しくない(2)”, “どちらともいえない(3)”, “やや親しい(4)”, “きわめて親しい(5)” の5件法であった。

(2) 冗談行動尺度 想起した友人に対して過去に行った冗談行動の頻度を測定するため、冗談行動尺度(葉山・櫻井, 2008)を用いた。冗談行動尺度は、日常的な冗談(“最近起こった出来事を面白おかしく話す”), 攻撃的冗談(“相手を軽く攻撃するようなことを言ってじゃれ合う”), 自己高揚的冗談(“ささいな成功で自分には才能があると冗談で言う”), 他者高揚的冗談(“相手がファッションや髪型を変えたらモデルのようだと持ちあげる”), 自己卑下的冗談(“失敗した時に、「自分は何をやってもダメだ」というような冗談を言う”)という5つの下位尺度から構成されている。回答は5件法であり、26項目である。なお、葉山・櫻井(2008)においては、現在の冗談行動を測定するための尺度として冗談行動尺度を作成しているが、本研究においては、過去の冗談行動を尋ねることを目的としているため、回答ラベルを“全くしない(1)”, “あまりしない(2)”, “時々した(3)”, “よくした(4)”, “いつもした(5)”に修正した。項目得点は尺度を構成する各項目の得点を合算し、項目数で除した値を用いた。

(3) 冗談行動に相手が笑った頻度を問う項目 冗談行動尺度の各項目に対して、相手が笑った頻度を求めた⁶。回答ラベルは“全く笑わなかった(1)”, “あまり笑わなかった(2)”, “時々笑った(3)”, “よく笑った(4)”, “いつも笑った(5)”の5件法であった。なお、冗談行動と冗談に対して相手が笑った頻度の項目は、掛け合わせて項目ごとに合成得点を作成した。なお、掛け合わせて算出したこれらの項目を合算し、項目数で除した得点を項目得点とした。

(4) 冗談関係の認知を問う項目 葉山・櫻井(2008)が作成した項目であり、“冗談に対する肯定的反応に基づく他者理解感(以下“他者理解感”と略す)”と“冗談に対する被受容感(以下“被受容感”と略す)”という2側面から構成されている。回答ラベルは“全く当てはまらない(1)”, “あまり当てはまらない(2)”, “どちらともいえない(3)”, “やや当てはまる(4)”, “かなり当てはまる(5)”であった。項目得点は尺度を構成する各項目の得点を合算し、項目数で除した値を用いた。

(5) 親和的意図が伝わる期待 予備調査で明らかとなった話題に関する過激な冗談を取り上げる。過激な冗談とは具体的には、“外見や容姿”, “倫理的・性的タ

⁶ 冗談行動の各項目に対して“全くしない”という回答を選択した場合、相手が笑った頻度は無回答のままにしておくよう指示した。分析の際には1点として計算している。

ブー”, “悩み”, “友人や恋人” に関する相手をからかうような冗談である。これらに対応する5つの項目を作成した⁷。質問紙の教示文は“今後, 友人に対して, 以下のような冗談を, 相手を笑わせることを意図して言ったとします。その際に, どの程度そのような自分の意図が伝わると期待できますか”とした。回答ラベルは, “全く期待できない(1)”, “あまり期待できない(2)”, “どちらとも言えない(3)”, “やや期待できる(4)”, “とても期待できる(5)”の5件法である。

手続き 大学の講義の後に, 集団実施を行った。平均回答時間は15分程であった。

結果

想定した友人との親密度 相手の友人に対する親密度の平均値と標準偏差は4.04点(0.75)であり, 得点はほぼ正規分布していた。

尺度の構成 冗談行動尺度の回答ラベルを過去の行動を問う形式に修正しても冗談行動尺度の因子構造が再現されるかを検討するため, 5因子相関モデルの確認的因子分析を行った。その結果, 全ての項目は各因子にのみ.40以上の負荷を示し, 適合度指標はGFI=.85, AGFI=.82, RMSEA=.06となった。この値は, 葉山・櫻井(2008)が行った確認的因子分析における値とほぼ同程度であるため, 本研究においても同様の因子構造が再現されたと判断した。さらに, 相手が冗談に対して笑った頻度の得点を掛け合わせて算出した合成得点を用いた場合も, これらの適合度指標の値はGFI=.84, AGFI=.81, RMSEA=.06となり, 十分な値を示した。また, 各下位尺度の合成得点の内的一貫性は十分な値($\alpha=.79\sim.87$)であった。

記述統計量 親和的意図が伝わる期待の平均をそれぞれ算出した結果, これらの得点は全体的にやや低い得点を示した(Table 2)。もっとも高い得点を示した項目は“性的な内容を含んだ冗談を言う(平均2.75点)”であった。もっとも低い得点を示した項目は, “冗談で‘死んじゃえばいいのに’等の過激な言葉を使う”であった(平均2.30点)。

期待へ影響を及ぼす可能性のある変数の比較 親和

意図が伝わる期待と冗談関係の認知, 交友期間および親密度といった各変数との相関係数を算出した(Table 3)。その結果, 交友期間の長さは親和的意図が伝わる期待との間に有意な相関は見られなかった。親密度は, “体型・容姿”を除き, 他の4つの冗談との間にやや弱い正の相関($r=.13\sim.27$)が見られた。一方, 冗談関係の認知の下位項目である“他者理解感”と“被受容感”は全ての親和的意図が伝わる期待と正の相関が見られ, 全般的に親密度や交友期間よりも強い相関($r=.16\sim.33$)が見られた。

期待の形成プロセスの検討 期待形成プロセスに関して, 項目得点を観測変数に置き換え, 構造方程式モデリング(Structural Equation Modeling: SEM)を用いて検討を行った。その際, 日常生活における過去の冗談行動に相手が笑った経験を基にして, 冗談関係の認知が形成され, これらの冗談関係の認知から過激な冗談の親和的意図が伝わるという期待が形成されるというモデルを想定した。なお, モデルは, 以下のような予測を基に生成した。

冗談行動から冗談関係の認知へのパスの予測 どの冗談行動であっても, 相手が笑ったという経験が多ければ, “他者理解感”を促進すると考えられる。なぜならば, 冗談に関して他者を理解できているという認知は主に相手からのポジティブな反応を得ることで成立するため(葉山・櫻井, 2008), 相手が笑った経験と“他者理解感”は密接に関連していると予想されるからである。また, 攻撃的冗談と自己高揚的冗談に相手が笑った経験が多ければ, “被受容感”に正のパスを示すと予測した。これは, 葉山・櫻井(2008)において, 攻撃的冗談と自己高揚的冗談は“被受容感”と関連があることが示されているからである。他の冗談行動から“被受容感”にパスを想定しない理由としては, “日常的冗談”, “他者高揚的冗談”, “自己卑下的冗談”は相手を傷つけたり, 不快にさせる内容を含まないため, これらの冗談にいくら相手が笑っても, “冗談が行き過ぎたとき相手が許してくれる”という被受容感は形成されないと予想されるためである。

冗談関係の認知から意図が伝わるという期待へのパスの予測 “被受容感”から全ての期待へ正のパスを示すことが予想される。“被受容感”が高い場合, 冗談が失敗した際でも相手から許してもらえるという安心感があり, 少なくとも冗談で言ったということは理解してもらえることが期待されるようになると考えられるからである。また, “他者理解感”からは相手の悩みや友人・恋人に関する冗談, そして性的冗談に対して

⁷ 冗談行動尺度の中にも攻撃的冗談があり, これらの項目と重なりとみなすこともできるが, 冗談行動尺度の項目は“過去の言い間違い”, “口癖や癖”, “間違いや失敗”という相手の行動をからかう内容であり, Kruger et al. (2006)の3つの分類の内もっとも知覚のズレが少ないからかいから構成されている。こうしたからかいは相手のアイデンティティを侵害する程度が低いと考えられるため, Kowalski et al. (2001)の分類においては, 向社会的からかいに当たり, 冗談と同列に扱うことが可能であると判断した。

Table 2 過激な冗談の親和的意図が伝わるという期待に関する項目および平均値

カテゴリー名	質問項目	平均	SD
外見や行動	相手の体型や容姿を軽くからかうような冗談を言う	2.31	1.08
倫理的タブー	冗談で「死んじゃえばいいのに」等の言葉を言う	2.30	1.30
性的タブー	性的内容を含んだ冗談を言う	2.75	1.32
聞き手の悩み	相手が悩んでいることを軽くからかうような冗談を言う	2.10	1.06
好きな人や物	相手の好きな友人や恋人をからかうような冗談を言う	2.48	1.28

Table 3 過激な冗談の親和的意図が伝わるという期待と各変数間の相関

	体型や容姿	倫理的タブー	性的タブー	聞き手の悩み	友人や恋人
他者理解感	.22**	.19**	.26**	.16**	.33**
被受容感	.29**	.30**	.22**	.30**	.31**
交友期間	.01	-.01	.07	.04	.05
親密度	.11	.15**	.17**	.13*	.27**

注) ** $p < .01$, * $p < .05$

注) “体型や容姿”, “倫理的タブー”, “性的タブー”, “聞き手の悩み”, “友人や恋人”はそれぞれ“に関する冗談”という箇所を省略している。

期待へ正の影響を示すと予想される。これらの冗談は特定の相手についてよく知らなければ言えない冗談であるので、他の冗談と比較して、他者を理解できているという認知がより強く関連すると考えられる。例えば、性的な冗談を言うかどうかを判断するには、相手のことをよく知り、性的冗談を好むかどうかを理解しているかが重要であろう。

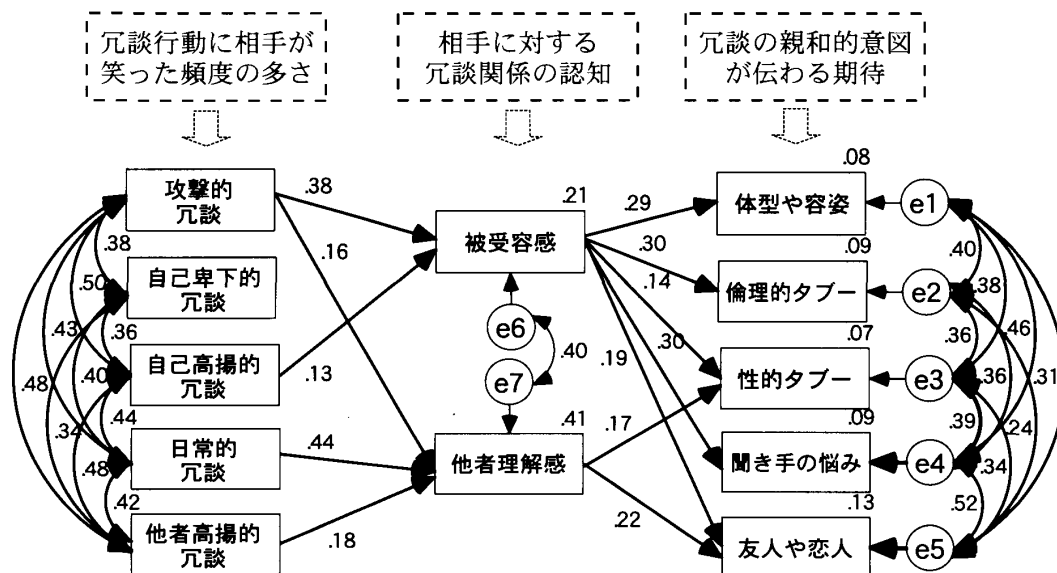
これらの予測を基にして、パス解析を行った結果、おおむね予測どおりの結果となった(Figure 1)。本モデルの適合度指標は、GFI = .96, AGFI = .90, CFI = .96,

RMSEA = .07 となり、本モデルは適合しているといえる。多くの予測が支持された一方、予測とは異なる結果も得られた。例えば、自己卑下的冗談と自己高揚的冗談から“他者理解感”に正のパスが見られなかった。また、“他者理解感”から“聞き手の悩み”の期待に対して正のパスが見られなかった。

全体的考察

本研究のまとめ

予備調査では、話し手が言った冗談に対して聞き手

**Figure 1** 親和的意図が伝わるという期待の形成プロセス

注) 図中の値は全て 5%水準以下で有意であった値である。

注) “体型や容姿”, “倫理的タブー”, “性的タブー”, “聞き手の悩み”, “友人や恋人”はそれぞれ“に関する冗談”という箇所を省略している。

が親和的意図を知覚せずに、怒りを感じるという現象を取り上げ、その背景となる要因を探索的に検討した。その結果、話題に関する要因がもっとも多く、“倫理的・性的タブーに関する冗談”、“聞き手の悩みに関する冗談”、“聞き手の外見や行動に関する冗談”、“聞き手の好きな人や物に関する冗談”といった過激な冗談を言われたときに、聞き手は親和的意図を知覚せず、怒りを感じるということが明らかとなった。予備調査の結果は、親和的意図を知覚しない場合、怒りなどの不快感情を感じるという Shapiro et al. (1991) や Kruger et al. (2006) の結果を支持するものであった。また、本研究においても話題に関する要因の他に、全体における割合は多くはないものの、状況に関する要因や、能力に関する要因、伝達手法に関する要因に関する要因が得られ、これらの要因が複合的に影響を及ぼしている可能性が示唆された。今後は話題以外の要因も検討していく必要があると考えられる。

次に、本調査では、上記のような過激な冗談の親和的意図が聞き手に伝わるという話し手の期待の背景となる要因を検討した。親和的意図が伝わるという期待は交友期間の長さとは相関関係が見られない一方で、親密度や冗談関係の認知と正の相関がみられた。このことから、過激な冗談の親和的意図が伝わるという期待は、交友期間が長くなれば自然と高まるものではなく、お互いを、冗談を言い合える関係であると認知することがより重要であることが示唆された。また、親密度も有効な変数であると考えられるが、冗談関係の認知よりも相関が弱く、より包括的な関係を捉える親密度では冗談に焦点付けられた変数を十分に捉えきれていないといえる。こうした点から、関係スキーマ (Baldwin, 1992 ; Planalp, 1987) の観点から親和的意図が伝わるという期待を捉えることの有効性が示されたといえる。

さらに、本研究では、関係スキーマの観点から、親和的意図が伝わるという期待の形成プロセスを検討した。その結果、親和的意図が伝わる期待が冗談関係の認知によって促進されていることが示された。特に、話し手は、“被受容感”を背景として、外見や容姿に関する冗談や“死んじゃえばいいのに”といった過激な冗談であっても、自分の意図が相手に伝わるという期待をすることが示された。つまり、こうした過激な冗談行動を導く可能性があるのは、行き過ぎてしまっても、相手は許してくれるだろうという相手に対する安心感であることが示唆された。

また、本研究で想定したモデルから、冗談関係の認

知の形成には、日常的な冗談を言ったり、他者の失敗や言い間違いをからかい合ったりし、相手が笑ったと認知することを通して、“被受容感”や“他者理解感”が高まることが明らかとなった。過激な冗談を言っても聞き手は親和的な意図を理解してくれるという期待の背景には、日常的な相互作用が関わっているということが明らかとなり、Planalp (1987) や Baldwin (1992) の指摘が支持された。親和的意図が伝わる期待というのは、冗談を言い合うという相互作用の中で徐々に形成されていくものであるといえる。

本研究の多くの予測が支持された一方で、予想とは異なる結果がいくつか得られた。例えば、期待の形成プロセスにおいて、自己卑下の冗談と自己高揚的冗談に対して相手が笑った経験から“他者理解感”に正のパスがみられなかった。これらの冗談は自分自身を冗談の対象としているため (葉山・櫻井, 2008), 相手が笑うという経験が多くても、他者を理解できているという認知には影響を及ぼさない可能性が考えられる。また、本研究において、自己卑下の冗談は冗談関係の認知へ有効なパスが見られなかった点は、この種の冗談行動は相手との関係性の認知とは独立したプロセスや機能を有している可能性がある。例えば、葉山・櫻井 (2008) は自己卑下の冗談の自己支援的な機能に言及している。

また、“他者理解感”から“聞き手の悩み”に正のパスがみられなかった。“聞き手の悩み”は“体型や容姿”や“倫理的タブー”と同様に他者を理解できていると認知したからといって、親和的意図が伝わると期待する訳ではないことが示唆された。

本研究で取り上げてきた過激な冗談は常に言っていけないというものではない。なぜならば、話し手と聞き手の間で親和的意図の共有ができていれば、過激な冗談は友情を深める働きをしたり (Martin, 2007), 暖かな結びつきを強める働きを有するからである。他者を怒らせたり、傷つけたりしないためには、できるだけ正確に相手のことを理解できていることが必要である。たとえ冗談を言うという遊戯的なコミュニケーションにおいてさえ、相手のことを考えることが必要なのである。こうした点は、実際の教育現場において特に重要であると考えられる。例えば、学校場面において、冗談や向社会的からかいの行き過ぎによって誤解が生じ、児童間で喧嘩が起こったり、一方が傷ついたりした場合、からかいそのものを禁止するのではなく、“相手の冗談の好みをわかっている”、“冗談が行き過ぎても許してもらえる”という冗談関係の認知が正確であるのかを児童に問いかけるという視点が必要で

あろう。また、こうした現象というのはその出来事だけに焦点を当てるのではなく、前述したように、日常的にどのような相互作用を行っているかに着目することも有効だろう。例えば、日常的な会話において作り笑いをしやすい児童や冗談に対して楽しんでいる振りをしやすい児童は、話し手の冗談関係の認知を誤らせる危険性が高く、過激な冗談を言われる頻度が多くなるかもしれない。

最後に、本研究の課題として以下の2点が考えられる。まず1点目は、本研究の対象者が大学生に限定されている点である。本研究においては、親和的意図が相手に伝わる期待の得点は総じて高くはなかったが、中学生や高校生を対象とした場合、本研究の結果よりも、高い期待の程度を示す可能性がある。特に、からかいによって聞き手が傷つくといった現象は、中学生や高校生により多く見られるのではないかと考えられる。こうした可能性を検討するため、今後は中学生・高校生といった大学生以下の就学段階を調査対象として本研究のモデルを検討する必要がある。

2点目は、本調査は質問紙調査によるモデルの検証であり、話し手の立場に関する調査に留まった点である。質問紙調査は、多数のサンプルのデータを収集可能であるため、大規模なデータを必要とするモデル検証に適するというメリットがある。しかしながら、本研究の着目している現象は話し手と聞き手の親和的意図の解釈のズレであるため、2者の関係性を含めたより発展的な検討のためには、友人同士のペアを対象とした実験的手法を用いる必要がある。例えば、お互いに対する冗談関係の認知を測定することにより、冗談関係の認知の正確性を検討することが可能になる。

以上のように、いくつか検討すべき課題は残されたものの、関係スキーマの観点から冗談に対して聞き手が怒るという現象を検討することで、こうした現象をコミュニケーション上の問題として扱えることが示唆された点で、本研究は意義があると考えられる。冗談や向社会的からかいが友人間の問題へと発展する可能性があることを考慮すると、今後さらにからかいや過激な冗談に関する研究を行っていくことが望まれる。

引用文献

- Baldwin, W. M. (1992). Relational schemas and the processing of social information. *Psychological Bulletin*, **112**, 461-484.
- Brown, P., & Levinson, S. (1987). *Politeness : Some universals in language usage*. Cambridge, UK : Cambridge University Press.
- Chelune, G. J., Robison, J. T., & Kommer, M. J. (1984). A cognitive interactional model of intimate relationships. In V. J. Derlega (Ed.), *Communication, intimacy, and close relationships* (pp. 11-40). Orlando, FL : Academic Press.
- 遠藤由美 (2007). 役割と社会的スキルがからかい認知に及ぼす影響 関西大学社会学部紀要 **38**, 119-131. (Endo, Y. (2000). Effect of social skill and role in teasing on the perception of teasing incident. *Bulletin of the Faculty of Sociology, Kansai University*, **38**, 119-131.)
- Endo, Y. (2007). Divisions in subjective construction of teasing incidents : Role and social skill level in the teasing function. *Japanese Psychological Research*, **49**, 111-120.
- 榎本博明 (1997). 自己開示の心理学的研究 北大路書房
- Fraley, B., & Aron, A. (2004). The effect of a shared humorous experience on closeness in initial encounters. *Personal Relationships*, **11**, 61-78.
- 葉山大地・櫻井茂男 (2008). 友人に対する冗談関係の認知が冗談行動へ及ぼす影響 心理学研究, **79**, 18-26. (Hayama, D., & Sakurai, S. (2008). The effects of cognitions of joking relationships to friends on joking behaviors. *Japanese Journal of Psychology*, **79**, 18-26.)
- Keltner, D., Young, R. C., Heerey, A., Oemig, C., & Monarch, N. D. (1998). Teasing in hierarchical and intimate relations. *Journal of Personality and Social Psychology*, **75**, 1231-1247.
- Kowalski, R. M. (2000). "I was only kidding" : Victims' and perpetrators' perceptions of teasing. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **26**, 231-241.
- Kowalski, R. M., Howerton, E., & McKenzie, R. (2001). Permitted disrespect : Teasing in interpersonal interactions. In R. M. Kowalski (Ed.), *Behaving badly : Aversive behaviors in interpersonal relationships* (pp. 177-202). Washington, DC : American Psychological Association.
- Kruger, J., Gordon, C. L., & Kuban, J. (2006). Intentions in teasing : When "just kidding" isn't

- good enough. *Journal of Personality and Social Psychology*, **90**, 412-425.
- Lampert, M. D., & Ervin-Tripp, S. M. (2006). Risky laughter : Teasing and self-directed joking among male and female friends. *Journal of Pragmatics*, **38**, 51-72.
- Martin, R. A. (2007). *The psychology of humor : Integrative approach*. London : Elsevier Academic Press.
- Martin, R. A., Puhlik-Doris, P., Larsen, G., Gray, J., & Weir, K. (2003). Individual differences in uses of humor and their relation to psychological well-being : Development of the Humor Styles Questionnaire. *Journal of Research in Personality*, **37**, 48-75.
- Miller, P. (1986). Teasing as language socialization and verbal play in a white working-class community. In B. B. Schieffelin & E. Ochs (Eds.), *Language socialization across culture : Studies in the social and cultural foundations of language* (pp. 199-212). Cambridge, UK : Cambridge University Press.
- Norrick, N. R. (1994). Involvement and joking in conversation. *Journal of Pragmatics*, **22**, 409-430.
- Planalp, S. (1987). Interplay between relational knowledge and events. In R. Burnett, P. McGhee, & D. Clarke (Eds.), *Accounting for relationships* (pp. 175-192). London : Methuen.
- Oring, E. (1994). Humor and the suppression of sentiment. *Humor : International Journal of Humor Research*, **7**, 7-26.
- Roberts, W. B., Jr., & Coursol, D. H. (1996). Strategies for intervention with childhood and adolescent victims of bullying, teasing, and intimidation in school settings. *Elementary School Guidance and Counseling*, **30**, 204-212.
- Shapiro, J. P., Baumeister, R. F., & Kessler, J. W. (1991). A three-component model of children's teasing : Aggression, humor, and ambiguity. *Journal of Social and Clinical Psychology*, **10**, 459-472.
- 寺崎正治・岸本陽一・古賀愛人 (1992). 多面的感情状態尺度の作成 心理学研究, **62**, 350-356. (Terasaki, S., Kishimoto, Y., & Koga, A. (1992). Construction of multiple mood scale. *Japanese Journal of Psychology*, **62**, 350-356.)
- 遠矢幸子 (1996). 友人関係の特性と展開 大坊郁夫・奥田秀宇 (編) 親密な対人関係の科学 誠信書房

(2008.1.16 受稿, 7.19 受理)

Extreme Jokes : Process by Which Speakers Form Expectations of Communicating Benign Intentions

DAICHI HAYAMA AND SHIGEO SAKURAI (GRADUATE SCHOOL OF COMPREHENSIVE HUMAN SCIENCE, UNIVERSITY OF TSUKUBA)

JAPANESE JOURNAL OF EDUCATIONAL PSYCHOLOGY, 2008, 56, 523—533

The purpose of the present study was to examine the process that speakers follow when forming expectations of communicating to listeners that an extreme joke has benign intentions. “Extreme jokes” are defined as jokes that make a listener angry. A pilot study with university students (87 men, 72 women) indicated that extreme jokes could be classified into 4 categories : jokes about ethical or sexual taboos, jokes about the listener’s distress, jokes about the listener’s appearance or behavior, and jokes about people or objects that the listener likes. University students (106 men, 145 women) were asked to imagine an actual friend when completing a questionnaire about that friend. In relation to the formation process of the speaker’s expectations, structural equation modeling (SEM) revealed that the “sense of being accepted by one’s friend about the joke” positively influenced the speaker’s expectations of communicating the benign intentions of all extreme jokes. The “sense of understanding one’s friend’s preference for jokes based on positive reactions” only influenced “jokes about sexual taboos” and “jokes about one’s friend’s friends or lover.” Structural equation modeling also indicated that the cognitions of joking relationships were formed through experience with the listener’s laughter following joking behavior.

Key Words : jokes, teasing, expectations of communicating benign intentions, cognition of joking relationships, joking behavior